

学習塾講師を対象とした構成的グループエンカウンター による自尊感情育成の研究

A study to improve teachers' self-esteem
by Structured Encounter at Tutoring Schools

鎌水 翔太

跡見学園女子大学大学院
人文科学研究科臨床心理学専攻

Shota Yarimizu

Division of Clinical Psychology,
Graduate School of Humanities,

Atomi University

要 約

本研究では、学習塾の講師に対し、構成的グループエンカウンター(SGE)を研修型形式で6時間実施し、自尊感情の変化に影響を及ぼすかどうかを検討した。自尊感情尺度の結果や振り返り用紙、自由記述式調査の内容から、エクササイズを通して、重要他者である職場の仲間から自分の良さを認められる経験をし、自己受容できたことで自尊感情の向上をもたらしたことが示唆された。また、20答法の記述内容から、自己受容でき、自尊感情が高まる体験をしたことで、自己概念が肯定的に変化したことがわかった。学習塾講師に対して、自尊感情を上げるねらいの構成的グループエンカウンターを実施することで、短期間でも自尊感情を育成できる可能性が示された。

【Key Words】構成的グループエンカウンター、自尊感情、自己受容、自己概念

I 問題と目的

エンカウンター・グループ(EG)は、グループ体験による自他理解を通して個人の心理的成長を目指したものであるが、1940年代後半ごろから、Rogersらによって始められ、わが国では70年代ごろから盛んに実施されるようになった。EGにはRogers流のベーシックなもの(BEG)のほかに、エクササイズ(相互理解を深めるための課題)などを取り入れた構成的なEGである

構成的グループエンカウンター(以下SGE)があるが、SGEはエクササイズという「枠」があるために、参加者の心的外傷を予防しやすいことや、専門的なカウンセラーでなくても比較的实施が容易であることなどが言われており(國分, 1992)、教育現場を中心に広がりを見せている。その一方で、SGEはBEGに比べると研究は質的、量的にかなり遅れているという指摘がある(野島, 2000)。

Rosenberg(1965)によると、自尊感情と

は他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己へ尊重や価値を評価する程度のことである。また、自身を「非常によい(very good)」と感ずることではなく、「これでよい(good enough)」と感ずる程度が自尊感情の高さを示すと考へており、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味するとしている。

一方、教育現場ではSGEが導入されている。SGEの目標はあたたかくて受容的な自由な人間関係における心と心のふれあいと自他の固有性、独自性の発見によりメンバーの行動変容を促すものである。SGEのエクササイズには自尊感情を高めることを目的としたものがあり、そのエクササイズを通して自分で自分を認めていけるようになり自尊感情の向上が期待できる(國分・國分, 2004)。

SGEには、健全な成人を対象に、2泊3日、3泊4日などの合宿で、文化的孤島(未知集団)を形成して実施するジェネリックSGEと、児童生徒や専修学校、大学の学生やカウンセリング研修の受講者などを対象に、学習者の教育課題の達成を目的にしているスペシフィックSGEの2種類がある(國分・國分, 2004)。水野(2007)は青年後期の学生に対して毎週1回(90分)スペシフィックSGEを合計11回実施し、自尊感情にSGEの効果が認められなかったと報告しており、SEGで自尊感情を変容させるためには、合宿形式などのより充実した長期間の実施が必要になると述べている。しかし、短時間の研修などによるスペシフィックSGEにおいても、自尊感情を

向上させる効果のあるSGEを重点的に導入したプログラムを実施するなどの工夫をすることにより、自尊感情を上げることは可能ではなかろうか。

そこで、本研究の目的は、学習塾研修会において、自尊感情を向上させる効果のあるSGEのエクササイズを重点的に導入したプログラムを行うことによって、短期のスペシフィックSGEにおいても自尊感情を育成できるか否かを検討するものとする。

II 方法

1. SEGの位置付け

本研究は2017年10月8日と15日に行われた都内にある学習塾Yの研修会の一環として実施した。研修会の題材は生徒の自尊感情をいかにしてあげるかであり、そのためにはまず講師自身の自尊感情をあげる必要があるという結論に至った。

2. 参加者

参加者は学習塾Yの講師8名(男性8名)。そのうち途中参加者が3名いたため、結果の分析の対象としたのは全回参加した5名である。5名の参加者をそれぞれA, B, C, D, Eと表記する。年齢構成は21歳~36歳(平均年齢25.6歳, 標準偏差5.6歳)であった。

3. 質問紙

1) 自尊感情尺度

自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)はRosenberg(1965)の尺度の邦訳版であり、計10項目である。Rosenbergの自尊感情尺度は多くの研究で用いられており、SGE研究においても頻繁に用いられてい

る。この調査は、第1回SGE実施の事前及び第2回SGE実施の事後に実施した。

2) TST: Twenty Statements Test (20答法)

TSTは、KuhnとMcPartland(1954)により自己態度の実験的測定法として開発された自由記述法である。自己記述の全体から、個人の自己観、すなわち、自己概念・自己像・自己自身への態度など、個人が自分自身をどのようにとらえているかを簡便に捉えることができる(田辺・正保, 1997)。この調査は、第1回目SGE実施の事前及び第2回SGE実施の事後に実施した。

3) 振り返り用紙

久能・野崎(2004)が作成したものを使用した。質問項目は、①リーダーの説明に対する評価、②エクササイズに対する率直な印象や評価、③自己表現の度合い、④自己理解の度合い、⑤他者理解の度合い、⑥エクササイズに対する率直な印象や評価、⑦感想(自由記述)からなり、4件法で評価を求めた。この調査は第1回SGEと第2回SGE実施の事後それぞれに実施した。

4) 記述回答式調査

筆者が作成したものを使用した。SGE体験を通じた感想とその理由を記述回答で求めた。また参加者の主観的な自尊感情の向上を5件法で評価を求め、その理由を記述回答で求めた。質問項目は①SGE体験からの影響、②SGE体験で得た自己の気づき、③その理由、④SGE体験で得た他者の気づき、⑤その理由、⑥主観的な自尊感情の向上、⑦その理由からなる。この調査は第2回SGE実施後に実施した。

4. SGE実施の手続き

本研究のSGEは学習塾Yの研修会の一環として、10月8日の第1回と10月15日の第2回の計2回にわたって実施し、それぞれ3時間程度、計6時間であった。各エクササイズの前にねらい、手順、ルールを確認した上で筆者がリーダーとなりエクササイズを行い、その後にシェアリングを行った。SGEの実施にあたり、國分・國分(2004)から合計13種類のエクササイズを選んだ。第1回では、将来願望、肩もみエンカウンター、友達ビンゴ、四人一組(他者紹介)、君を褒めるよ、背中合わせの会話、簡便内観の順に、第2回では、二人一組、みじめな体験成功体験、トラストフォール、トラストウォール、私はあなたが好きですなぜならば、私は私が好きですなぜならばの順にエクササイズを実施した。

5. フォローアップテスト(以下F-Uテスト): 2018年4月

全プログラム終了後6ヶ月後にF-Uテストを実施した。テストは自尊感情尺度とTSTの2つである。

Ⅲ 結果と考察

1. 自尊感情尺度

1) 参加者の自尊感情の変化

参加者の自尊感情尺度における得点結果をTable 1に示す。ここから、参加者の得点は事前に比べて事後にいずれも高くなっていることが分かる。これは野崎ら(2003)の教職員を対象とした短時間の研修型SGEの結果を支持するものとなった。この結果を裏付けるものとして、事後に行った自由記述式調査の項目4-1「今回のSGE

「あなたの自尊感情は上がったと思いますか。」において、5人全員が5(とてもそう思う)と回答しており、参加者の主観としても自尊感情の向上が実感できる水準にあったことがわかる。

このように、参加者の得点の変化をみると、SGEを実施した6か月後のF-Uの変化は一様ではないが、直後の変化においては全体として増加傾向が認められる。

Table 1 参加者における自尊感情尺度の変化

| ID | Pre | Post | F-U |
|----|-----|------|-----|
| A | 40 | 46 | 44 |
| B | 37 | 40 | 34 |
| C | 41 | 42 | 41 |
| D | 28 | 42 | 43 |
| E | 28 | 40 | 35 |

2) 各参加者の自尊感情の変化

Aの自尊感情尺度の事前の得点は40と高いにも関わらず事後の得点は46と上がっている。樽木(1990)や星野, 正保(2003)はポジティブフィードバックが与えられた場合、自尊感情の高い生徒には自信・自己評価とも変化が見られないと述べているが、この事例は自尊感情が元々高い者でも自尊感情はさらに上がりうることを示しており、さらなる検証が必要であると思われる。自尊感情が上がった理由について、記述回答式調査で「自己開示の幅が広がり、他人に対して今後の人生においてもありのままの自分が出せる自信がついた。自分のことを好きな理由を自分で述べたり、人に言ってもらったり、具体的に言語化されることで自信がついた。」と記述している。SGEにより、自分の固有性を打ち出せた

ことでありたいようにあれたこと、またそれが他者に受容されたことで自己受容ができたことが自尊感情を高めたのであろう。F-Uの得点は44と得点は少し下がっているものの、事前が40であることを考慮すると、自尊感情の高まりはある程度維持されていることがわかる。

Bの自尊感情尺度の事前の得点は37で事後の得点は40と3得点の上昇が見られる。また、自尊感情が上がった理由について、記述回答式調査で「『私はあなたが好きです。なぜなら』のエクササイズで会話などいつも自分が何気なく行っていた行動を褒められたため。」と記述している。自分が普段行っている行為を他者が褒めてくれたことにより、他者は自分の行いをきちんと見てくれており、また認めてくれるのだと感じられた体験が自尊感情の向上につながった可能性が考えられる。F-Uの得点は34と、事前よりも得点が下がっていた。これは一連の活動を通してBが自己を見つめなおし、その後、高い目標に挑戦をし、その過程で困難にぶつかっている状況が自尊感情を低下させたのではないかと考えられる。それは、Bが記述式回答調査で、「自分は常に目標がある」と記述していたことや、振り返り用紙で「自分を見つめなおすいい機会だった」「自分の信念を思い出すことができた」と記述していること、そしてF-UのTSTで、「私にはなりたい職業があります」「私にはなりたい職業に就くためのスキルはありません」「私は夢のためなら諦めない人間です」「私は人生の第3章に向けて努力しています」と記述していることから伺える。そして、この困難を乗り越え、目標を達成した暁には、Bの自

尊感情は高まることが予想される。

Cの自尊感情尺度の事前の得点は41で事後の得点は42であり、あまり変化が見られない。しかし、振り返り用紙の自由感想の記述に「今回、多くの人の良いところを再発見でき、人の良点を自分にも取り込んで、糧にしたいと思った」「自分の将来設計について考え直さなければならない点や、新たに組み込んだことなど、今後大きく生き方を変えるような発見であった」などに見られるように、自分の内面を見つめ、自己を改善しようとする意識が高まっている。そのことは自己を批判的に見る内省力も高まったことを意味し、単純に自尊感情を高めるような変化としては現れなかったと考えられる。齋藤・中谷(2001)は、SGEの目標を達成するための最も有効なエクササイズは傾聴を基調とするものであり、本人の内省を高め、これまで以上に自分自身を見つめ直す機会を与えていたと述べている。今研究のSGEでは、「二人一組(ききあう)」「肩もみエンカウンター」「みじめな体験・成功体験」が傾聴を基調としたエクササイズに当たり、自分の問題や特性に気づいた結果、自尊感情尺度の得点の上昇があまり見られなかったと考えられる。しかし、自尊感情が上がった理由について、記述回答式調査で「初対面の人々の中でも、自然に自分がまとめ役となって動けるようになった。」と記述していたり、振り返り用紙の自由感想欄には「昔から、良い子でいなければならないということに囚われ、友人であっても本性をさらけ出して接することはできなかったが、今回のやり取りを通して、少しずつ自分を人に表現することができたような気がする。」と記

述しているように、SGEを通しての肯定的な自己変容の記述が目立ち、自尊感情尺度には反映されなかったが、Cの自己意識において、ポジティブで大きな変化があったことが認められる。F-Uの得点は41であり、事前、事後と比べてもほとんど変わらなかった。

Dの自尊感情尺度の得点は事前が28で事後が42と大幅に上がっている。久能・野崎(2004)はPTA短期研修型SGEを実施し、自尊感情の合計得点において、H群では有意差が認められず、M群では上昇傾向を、L群では有意な上昇を見出している。Dは本研究においては、L群にあたり有意な上昇を見出しうるが、自尊感情尺度得点14の上昇は先行研究と比べてもはるかに大きく特筆すべき点である。その理由として、自由記述式調査に「自己成長に向けた取り組みを実施している」と記述しているようにDのSGE参加に対するモチベーションの高さが挙げられる。中田(1999)は非構成法の研究で、自由参加型に対する研修型の困難性として、「動機づけ・自発性の低さ」、「自己開示の少なさ」、「参加者の頻繁な逸楽行動」の3点を挙げている。しかし、Dはモチベーションが高く、研修型の困難性として指摘される動機づけ等に特別な配慮を必要としなかった。したがって、SGEの効果を高めるためには、参加に対するモチベーションを上げる工夫が有効であると考えられる。また、自尊感情が上がった理由について、記述回答式調査で「他者から褒められたり、感謝されることや自分の行動を認めてもらうフィードバックを得たことなどによって自信がついたから」と回答しており、自尊感情の上昇を自覚している

ことがわかる。F-Uの得点は43とむしろ事後より高くなっていった。

Eの自尊感情尺度の得点は事前が28で事後が40と大幅に上がっている。また、自尊感情が上がった理由について、記述回答式調査で「『私はあなたが好きです。なぜなら』のワークにて、素直だったり明るいといった内容が出てきたところ。」と記述しており、自尊感情を上げるねらいのエクササイズが効果的に影響を及ぼしたことが伺える。F-Uの得点は35と下がっているものの、事前の得点と比較すると十分な差があり、自尊感情の高まりはある程度保持されていることが伺える。

以上のことから、学習塾Yの研修会において、短期のスペシフィックSGE実施は参加者の自尊感情の向上に一定の効果を及ぼすことが示唆された。

2. TST

TSTの分析は、田辺・正保(1997)の反応分類カテゴリーに従って行った。分析は筆者が単独で行った。

1) 参加者のTST記述数の変化

ここでは変化の方向性を探るために、自己を肯定的に捉えた記述数と、自己を否定的に捉えた記述数の変化を検討した。自己を肯定的に捉えた記述(+)をP+, S+, O+とし、その記述数の変化をTable 2に示す。自己を否定的に捉えた記述(-)をP-, S-, O-とし、その記述数の変化をTable 3に示す。

ここから参加者の記述数は、自己を肯定的に捉えた記述は事前に比べて事後にはいずれも増えていることと、自己を否定的に捉えた記述は変わらないか減っていること

がわかり、参加者の自己概念が肯定的な方向に変化したことがわかる。

Table 2 参加者の自己を肯定的に捉えたTSTの記述数(+)の変化

| TST + | | | |
|-------|-----|------|-----|
| ID | Pre | Post | F-U |
| A | 17 | 20 | 20 |
| B | 5 | 17 | 13 |
| C | 8 | 11 | 9 |
| D | 5 | 20 | 20 |
| E | 5 | 10 | 3 |

Table 3 参加者の自己を否定的に捉えたTSTの記述数(-)の変化

| TST - | | | |
|-------|-----|------|-----|
| ID | Pre | Post | F-U |
| A | 0 | 0 | 0 |
| B | 7 | 0 | 4 |
| C | 4 | 4 | 2 |
| D | 2 | 0 | 0 |
| E | 11 | 5 | 3 |

2) 各参加者のTSTの記述内容の変化

Aの自己を肯定的に捉えている記述は、事前では「旅が好き」「本が好き」「車を買いたい」など興味・関心が物質や活動に対するものが半数以上を占めていたが、事後は「私は人に感謝することができている」「私は自分の生き方に自信を持つことができる」「私は他人の価値観を柔軟に受け入れることができる」など肯定的な自己の特徴への記述が大半を占めるようになった。SGEを体験したことで自分の内面に目を向けるようになり、自己を肯定的に捉えるようになったと言える。また振り返り用紙に「私は〜で始まる文章の内容が変わっ

た」と記述していることから、このTSTの質的な変化を本人が自覚しており、本人にとってその変化はとても意義のある経験であったことがわかる。また、F-Uでは「私は仕事が好きです」「私はストレスフリーです」「私は教育が好きです」と学習塾Yという職場に対する肯定的な記述がみられるようになり、職場への印象や、職場に対する自己概念も肯定的に変化していることが伺える。

Bの自己を肯定的に捉えている記述は、事前では「私は決めつける人が嫌い」や「私は権力を振りかざす人が嫌い」など人に対する否定的な見方があったが、事後ではそういった記述は見られなくなり、代わりに「私は仲間恵まれている」という他者を肯定的に捉えた記述に変わった。TSTの自己を否定的に捉えた記述も7から0に減っている。これはエクササイズやシェアリングを通して他者から肯定的な発言やフィードバックをもらったことで、他者に対する見方が肯定的に変化したと考えられる。また、事後の記述に事前の記述には見られなかった「私は人から信頼されたい」や「私は人から好かれたい」といった自己を肯定的に変化させたいという願望が見られるようになった。F-Uでは、「私にはなりたい職業があります」「私はなりたい職業のために勉強中です」「私は絶対にその職業に就きたいです」「私は楽しい人生を生きています」などと記述しており、現在自己を実現させるために目標に向かって努力していることがわかる。自尊感情を高め、自己を見つめなおす経験をもたらした本SGEがBの自己実現に向けた挑戦に、ある一定の貢献をすることができたのでは

なかろうか。

Cの自己を肯定的に捉えている記述は事前の「私はあまり怒りません」に対して、事後は「私は人一倍頑張っている」、「私は今楽しい」、「私はいい経験をした」など質的に変化している。一方、自己を否定的に捉えた記述は4と変わらなかった。これは事後の自己を否定的に捉えた「私には心残りなことがある」、「私は子どものような考えをよくする」、「私は人目を気にする」などの記述内容から、自己理解が進んだことにより、自己意識が上がったためと考えられる。F-Uでは、「私はよく悩みます」と記述しており、自己について更なる模索をしていることがわかる。

Dの事後の自己を肯定的に捉える記述には「私は良い部分を持っている」、「私は自己成長する環境にいる」、「私は言われたことを素直に受け入れていることがある」、「私はできることが増えている」、「私は自由に生きている気がする」など自尊感情が高まったことをうかがわせる内容が散在している。自己評価が高まり、自信をもつことができたことが伺える。F-Uでは、「私は楽しく毎日を過ごしています」「私は幸せです」と記述しており、自尊感情の高まりが、Dの幸福感にも影響を及ぼしたことがわかる。

Eの自己に対する記述において事前では「私はわりとひねくれている」、「私は行動が遅い」、「私はわりと恥ずかしがりやだ」など否定的なものが目立つが、事後は「私は楽観的だ」、「私は割と自分に満足している」、「私はなんだかんだやることに対しての責任はある」、「私は充実した活動ができている」、「私は頑張れる」と肯定的な記述

に変化しており、自己を肯定的に受容できたことが分かる。また事後の記述に「私はそこそこ人間関係がいい」、「私は何かと周りに感謝している」など他者との関係性に関する内容が見られる。振り返り用紙の自由感想欄には「非常に新鮮な体験でした。打ち解けたのか他の方々の色々な話を聞いたところは個人的にプラスになりました。」とある。國分・國分(2004)は「癒し」は、自分のホンネに気づき、それを無条件に受け入れられるという人間関係において実現すると述べている。Eは他者に無条件に受け入れられるという今まであまり経験できなかった体験を通して、他者とのあたたかい関係性の良さに気づけたのではないだろうか。それが自己変革や人間的成長を促したと考えられる。F-Uでは、「私はもっと良いところを伸ばしていきたい」と記述しており、自己受容をさらに広げていこうとしていることが伺える。

以上のことから参加者のTSTの記述から、SGEのエクササイズを実施する前と比べて、実施後は自分の内面により目を向け、自尊感情が高まり、自己概念は肯定的に変化したことが伺える。

3. 振り返り用紙、記述回答式調査

振り返り用紙の自由記述による参加者の感想と記述回答式調査の記述を合わせたものをKJ法(川喜田, 1967)の要領でカテゴライズした結果、全記述数は60件で次のようなカテゴリーが見出された。記述数の多かった順に「自己再発見」(11.9%)、「他者理解」(11.9%)、「自信の獲得」(11.9%)、「今後の自分」(10.1%)、「自己開示」(10.1%)、「他者発見」(8.5%)、「自己理解」(6.8%)、

「自分の長所を伸ばす」(6.8%)、「SGEの感想」(6.8%)、「他者からの受容」(5.1%)、「他者の長所を取り入れる」(5.1%)、「チームワーク」(3.4%)、「スキルアップ」(3.4%)であった。

IV 総合考察

本研究では、自尊感情に着目し、それを高めるための手段としてSGEを用いた。結果から、この取り組みには一定の効果があつたが、その効果の持続は、個人によってばらつきがあり、個人差が大きかった。本研究において研修型SGEの実施が自尊感情の向上に一定の効果をもたらしたのは、次の理由が考えられる。

①エクササイズの構成が挙げられる。本研究では参加者の自尊感情の向上を目的としたことから、リレーションづくり、ふれあいの促進、自己理解という集団の凝集性を高めるための一般的な流れ(國分・國分, 2004)ではなく、リレーションづくり、自己理解・自己受容、信頼体験という流れでエクササイズを配置した。したがって、参加者の自尊感情の向上を目的としたSGEを実施する場合、リレーションづくり、自己理解・自己受容、信頼体験という大きな流れでプログラムをデザインすることが有効であると考えられる。

②参加者のモチベーションの高さが挙げられる。本研究は学習塾Yの研修会の一環で実施しているが、参加者には任意での参加を呼びかけた。学習塾Yでは今年度の目標として生徒の自尊感情を上げることが掲げていたため、事前に各参加者には自尊感情をあげる動機づけがあり、特別な配慮を必要としなかった。従って、SGEの

効果を高めるためには事前の動機づけに配慮をし、強制参加型ではなく、自由参加型に構成することが望ましいと考えられる。

③ポジティブな観点によるシェアリングが挙げられる。シェアリングとは参加者がエクササイズで体験したことを分かち合うことであり、感情・思考・行動を修正・拡大することが目的である。これはエンカウンターの下位目標である自己理解、すなわち自他の固有性・独自性、かけがえのなさの発見を支える要となるものである(國分・國分, 2004)。本研究におけるSGEのシェアリングでは、エクササイズの体験を通じて感じた他者のポジティブな面、長所、ポジティブな感情を分かち合いの観点として参加者に与えた。これは本研究の目的である自尊感情の向上のために、欠くことのできない条件のひとつである。このようなシェアリングの体験が、ポジティブな自己イメージの再構築につながるものと考えた。その象徴的な例を振り返り用紙の自由記述と記述回答式調査の記述内容に見ることができる。「自己発見」の中にある「今回のSGEで自分の信念を思い出すことができた」や「自分が思っている以上に人から褒められる点が多かった」という記述がそれである。したがって、参加者の自尊感情の向上を目的としたSGEを実施する場合、ポジティブな観点を与えるシェアリングを行うタイプのスペシフィックSGEを実施することが有効だと考えられる。

以上のことから、自尊感情を向上させる効果のあるSGEのエクササイズを重点的に導入したプログラムを行うことによって、短期のスペシフィックSGEにおいても自尊感情を育成できる可能性があること

が示された。

謝辞

この度、本稿をまとめることを快く承諾して下さった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。また、論文作成にあたり、ご指導頂きました野島一彦教授に深く感謝いたします。

文献

- 星野治子・正保春彦(2003). 小学校における構成的グループエンカウンターによる自尊感情育成の研究 茨城大学教育実践研究, 22, 63-77.
- 懸田孝一・野崎徹(2006). 構成的グループエンカウンターを教員の10年経験者研修・大学講義で実施する意義 北海道教育大学紀要(教育科学編), 57(1), 83-95.
- 川喜田二郎(1967). 発想法 中央公論新社
- 國分康孝(1981). エンカウンター 誠信書房.
- 國分康孝(編)(1992). 構成的グループ・エンカウンター, 誠信書房.
- 國分康孝・國分久子(総編集)(2004). 構成的グループエンカウンター事典 図書文化.
- 水野邦夫(2008). 青年後期の学生に対する構成的グループエンカウンターの実施が心理的変化に及ぼす効果 聖泉論叢, 15, 95-109.
- 水野邦夫(2014). 構成的グループ・エンカウンターにおける感情体験が人間の成長に及ぼす影響—継続・研修型の問題点に対する改善のための提言を含めて— 帝塚山大学心理学部紀要, 3,

57-66.

中田重行(1999). 研修型エンカウンターグループにおけるファシリテーション逸楽—行動への対応を中心として— 人間性心理学研究, 17(1), 30-44.

野崎徹・早坂秀則・久能弘道(2003). 教職員短期研修型構成的グループエンカウンターが人間関係・自尊感情の向上に及ぼす効果, 北海道教育大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 4, 247-258.

野崎徹・久能弘道(2004). PTA 短期研修型構成的グループ・エンカウンターが人間関係・自尊感情の向上に及ぼす効果, 北海道教育大学紀要, 54(2), 51-71.

野島一彦(2000). 日本におけるエンカウンター・グループの実践と研究の展開: 1970-1999 九州大学心理学研究, 1, 11-19.

Rosenberg, M. (1965). *society and the adolescent self-image* Princeton: Princeton University Press.

齋藤百代・中谷隆(2001). 構成的グループ・エンカウンターにおけるエクササイズの効果 県立広島女子大学生生活科学部紀要, 7, 97-110.

田辺肇・正保春彦(1997). TST(20答法)による自己観の把握—反応分類手続きの作成と自己評価との関連による妥当性の検討— 教育相談研究, 35, 57-66.